金谷集を討ひらるゝあるしの入道
好けをそりて赤しるゝあのれ柳荘
屋てての間よあり書るに倩よつゝ
あ多たる書のの小口よりこゝれゝ氣
ねあゝてとゝ云てえゝふ碩布一蔓の
なせる俳諧歌仙りより巻中北
志興のゝるく逸れたるさゝあやキ近

慶英文庫

月お友学へ行る是をとゝよ格亀
も此ハ信のゝたくゝ山人を驚せんとの
計るゝんゝ志ゝしかゝ新才子の少
集る金を舎ハ切て送ゝる紀
るゝを思ゝて
玉ゝこゝ乃ゝゝ
もゝ〻夫も

旅硫をとりいてゝ紙のしるかゝ
ゝ自作るゝもてあまさゝ
つゝ赤あるゝ

戊午姉

六松子

柳荘

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一薫

碩布

[illegible]

[illegible]

天津乙女の[illegible]

[illegible]

[illegible]

薫

布

薫

四つまでは母の乳の夢　布
もの事は盥洗ふ産湯哉　蕉
さうは拾へふるまひて　蕉
ひりなるもたくさん
椎の花ちるや辰の神　布
なるなるへ青女房の掃き　蕉
ちいさな庵申し帯とき　布
蕉

とこ取りて寄せいさうの
松ほそうもちなや　蕉
五月の庵豆ほし小さく　布
うつくしふ
をきよ百ちるや　蕉
汐風の加減の咲て　布

蔵月　蔦

海士の袖も濡れまさるなり　布

北野の宮の御あがた　彦

雪あら荒小町の

神ぞ知る道なしの山　蔦

ちはやぶる　布

ちはやぶる　蔦

雲版を　布

雲の間の月　蔦

雲の月　布

宮の月　蔦

雁のこゑ　布

ちりぬ　彦

後彩　銀河

朝戸　彦

蔦

[illegible]の異ーてかく　桃山東山　布
[illegible]ある魚の三月　葱
この市代二百つきて[illegible]　布
[illegible]　葱
[illegible]の[illegible]　布
[illegible]
[illegible]父[illegible]　筆

[illegible]虫のあまり[illegible]と[illegible]馬の糞
[illegible]自[illegible]ある　碩布
[illegible]男[illegible]の[illegible]　一葱
[illegible]　空何

[illegible]人 橘文
實語 教よ寿の志ふ 意
空何海と高き[illegible]れ男人 布
あ知めて[illegible]れ百の[illegible] 葱
樹の[illegible]花頂山 何
かる[illegible]鼻を[illegible] 夫
[illegible]

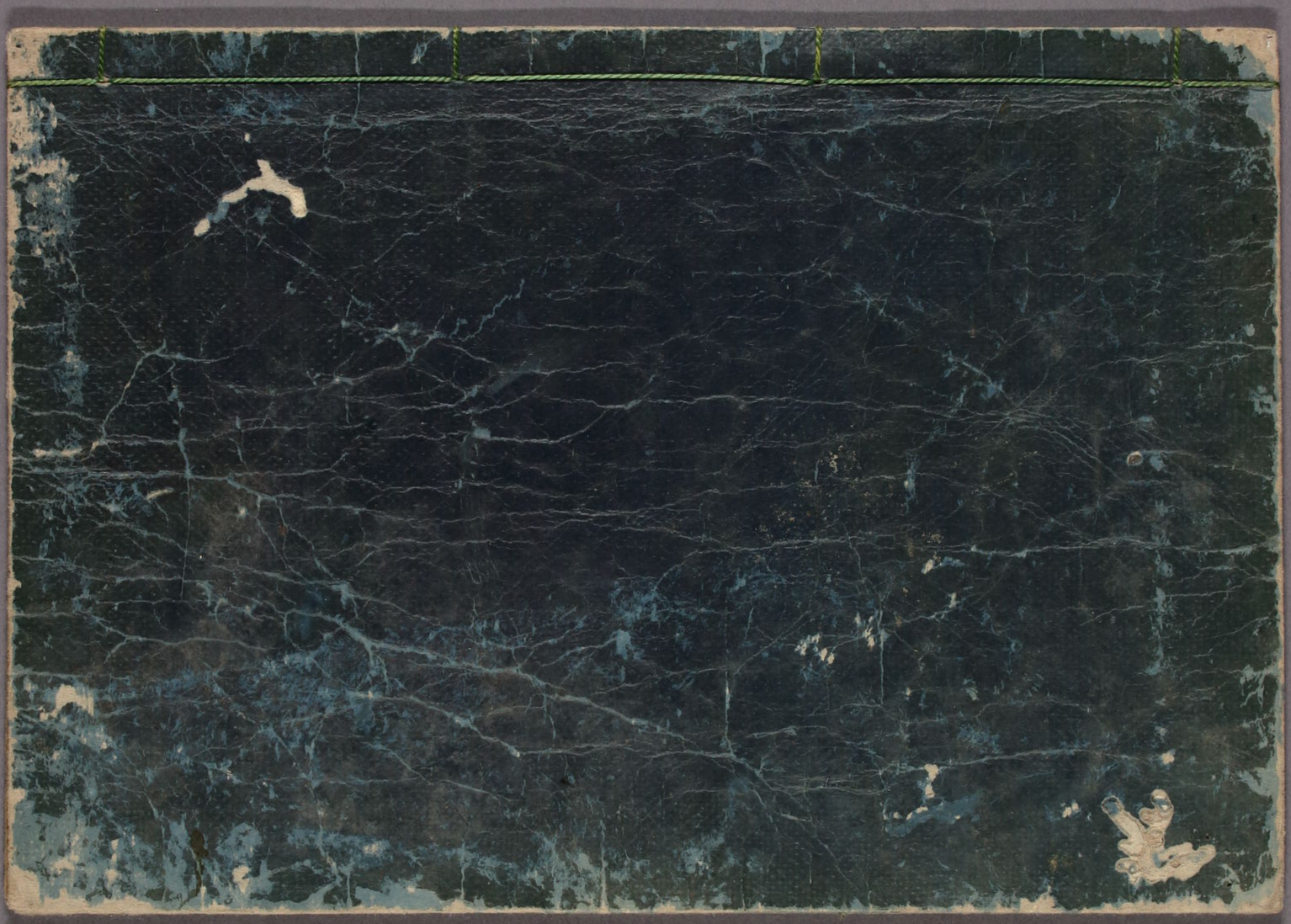
四

[illegible]の茄子を什 合[illegible] 布
櫃[illegible]の[illegible]の十三車 葱
仏 北[illegible]を頃ふ 何
[illegible]嬉[illegible] 夫
○[illegible]る瀬戸の際飯 意
一体のこころの祈[illegible] 布
[illegible] 葱

附言

天下全く是なる書籍にて全非なるの書なり誹謗又云ふ所いまだ全く是なるの論説あらん夫蕪村は新規をもとめて孤高に自ら入道のときは人界外の形をうしなひ自ら境は國を威すに兵革を以てせずして人を和するの玄德なり

仏は仙は夢主の富士にて未引馬のうけるきよとく曙蛙は世の風雅人ゑいるの姿を畫ふ人を思ふの實情を表し櫻は淡白にして上天のるのごとく言もなく香もなくただ只るを言ひ取るを蝶夢は抹香を以て蘭更は糞を踏その病にてまた全是なるの論なれはなる世を當

時在世の上る事をゆゆしく御ぶれとも
死ぬる人ハ始めて見聞口ずさみ
年 初心のとき分て又この無孔笛を信て
ひとり吹る笛のひゝう節をおもふるの孔笛
全非ぬる世孔笛ハあるべきなり

寛政元年
菊月中旬